

## 調査・研究活動-2002年度-2003年度

|     |   |
|-----|---|
| 雑誌名 | アジア文化研究所研究年報  |
| 巻   | 38  |
| ページ | 290-306   |
| 発行年 | 2003  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00011342/">http://id.nii.ac.jp/1060/00011342/</a> |



## 調査・研究活動——二〇〇二年度～二〇〇三年度

本学の研究所組織の改組にともない、これまで永年にわたり続けられて来た五プロジェクト(1)社会変動と伝統文化の社会人類学的研究 (2)中国と周辺民族の交流と変遷 (3)アジア諸地域の社会変動とその比較文化的研究 (4)アジア社会への日本の文化的寄与—その歴史と変容— (5)近代化と文化変容—アジア諸国に展開する国際的企業を中心に—は今年度を以ってその研究活動を終えることとなりました。平成一五年度は、この五プロジェクトと、学術フロンティアによる研究活動、および新たに二プロジェクトが立ち上がり、新旧交雑した活動が展開されました。以下五プロジェクトによる調査・研究について報告いたします。

### 明治期における日本とオスマン朝との関係史の調査

研究員 三 沢 伸 生

期 間 二〇〇三年二月一日～一三三三

調査地 和歌山県 串本町

明治二十三(一八九〇)年にオスマン朝の軍艦エルトゥールル号が日本訪問を終えて本国帰還途上に和歌山県大島近郊にて座礁・沈没し、五百名以上の死者を出した。事件現場である大島は、現在の行政区分では、今回

の調査地である串本町に帰属する。

今回の調査においては、事件現場を実際に検分すること、ならびに大島に建設されたトルコ記念館および串本町役場に保存・陳列されている事件関連の史料を調査することにある。

トルコ記念館には残念ながら遺物史料が少ない。最も貴重な史料は事件発生時に生存者救護と死者の探索・埋葬の陣頭指揮をとった沖周尊重の日記である。この記録については和歌山県の郷土史などに再録されているが欠頁があると思われるので、現物の調査が不可欠である。今回は陳列ケースの構造上、拝見することができなかったが、いずれ現物の調査を行ないたい。この沖周日記について重要なのは、生存者たちの診断書の写しである。僻地でありながら、大島の間人たちは医者連れてきて生存者に対して懸命の看護を行なった。トルコ



写真1 エルトゥールル号事件現場

記念館に残されている墨書の診断書の写しは、言葉も分らないオスマン人士官たちの診断書である。こうした初期対応によって六十九名の生存者を数えるに至った。詳細に記された診断書は、日本の災害教訓史料としても第一級のものである。生存者たちは事件後数日を経て神戸に移されて、天皇の命令で派遣された日本赤十字社によって看護を受けることとなった

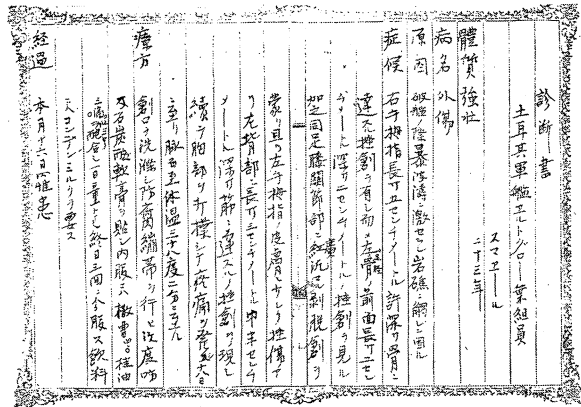


写真2 生存者の診断書（トルコ記念館所蔵）

が、こうした初期治療の記録が残されていたことは、従来ほとんど知られてこなかった。今回幸いにもトルコ記念館の好意により全てを複写収集することができた。

串本町役場においては後述する野田正太郎関連の遺品として、オスマン語新聞・野田が撮影した写真などを拝見し、その一部を串本町役場の好意により複写収集することができた。

## 明治期における日本とオスマン朝との関係史の調査

研究員 三沢伸生

期間 二〇〇三年二月一七日～一九日

調査地 青森県 八戸市

明治二十三（一八九〇）年にオスマン朝の軍艦エルトゥールル号が日本訪問を終えて本国帰還途上に和歌山県大島近郊にて座礁・沈没し、五百名以上の死者を出した。この『エルトゥールル号事件』に際して、活躍した

慶應義塾系の高級新聞である『時事新報』記者の野田正太郎（一八六八～一九〇四年）の生誕地が青森県八戸市である。現在もこの地には、正太郎の直孫にあたる野田康夫氏が住まわれている。

今回の調査は、野田宅に保存される正太郎関係の資料を閲覧させていただき、あわせて康夫氏への聞き取り調査を行なうことであった。ならびに今回の調査には、トルコ共和国のビデオ会社が同行した。二〇〇三年が日本の文部科学省の制定した「日本におけるトルコ年」のためである。

従来まで、明治期における日本とオスマン朝との関係史においてはイスタンブルに約二十年留まり、短いながらも刊本として自伝を残した山田寅次郎（一八六六～一九五七年）ばかりが注目を集めていた。しかし、筆者は明治期に刊行された日本の新聞・雑誌を丹念に分析することにより、山田より以前にイスタンブルへと渡った野田の活躍の重要性が明らかにすることができた（その詳細は、拙稿「一八九〇年におけるオスマン朝への日本軍艦比叡・金剛の派遣」『東洋大学社会学部紀要』三九―二、二〇〇一（二〇〇二）年、同「一八九〇年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金募集活動」『東洋大学社会学部紀要』四〇―一、二〇〇二年、同「一八九〇～九二年におけるオスマン朝に対する日本の義捐金処理活動」『東洋大学社会学部紀要』四一―一、二〇〇三年）。野田は、日本人新聞記者として初めてイスラーム世界に派遣され駐在した、日本のメディア史上における傑物である。野田の存在は、日本とオスマン朝、日本とイスラーム世界の交流史上において極めて重要である。しかしながら若くして没したことから、『時事新報』に投稿した記事以外に刊本がないことが、いつしか野田が果たした役割を忘却の彼方へと追いやってしまったのである。

今回の調査で、残念ながら野田家にはあまり多くの資料が残されておらず、わずかに残された資料も和歌山県のトルコ記念館に寄贈されていることを康夫氏からうかがうことが出来た。期待していた野田本人による資料が現存しないことは誠に残念であったが、逆説的にこれ以上日本に史料が現存しないという事実が判明したことが大きな収穫であったとも言える。

前述のように日本で刊行された新聞・雑誌はあらかじめ渉獵したので、今後は日本ではなくトルコ共和国に保存されるオスマン朝の文書史料および、オスマン語（古典トルコ語）の新聞・雑誌を分析することが不可欠である。

それでも康夫氏への聞き取り調査によって、野田正太郎と慶應義塾との関係、なかでも福澤諭吉から目をかけられていたという事実、さらに今まで不明とされていた野田正太郎の没した年月日が判明した（一九〇四年四月二七日）。最期の様子は伝わっていなかったが、若くして没したことが野田の存在を忘却させることに拍車をかけたことは想像に難くない。

### 最近の韓国の教育改革及び進路指導の動向調査

研究員 吉田 辰雄

期 間 二〇〇三年三月二四日～三〇日

調査地 韓国 ソウル市、釜山市

今まで進路指導の立場から、アジア地域の職業指導、進路指導の国際比較研究を継続的に行ってきた。このことを踏まえて、東洋大学アジア文化

研究所の研究の一環として、最近の韓国の教育改革及び進路指導の動向について調査研究のためソウル市と釜山市へ出張した。

中学校・高等学校の教育改革と進路指導について公立清涼中学校等を訪問し、教育計画書の提供を受け、ソウル市教育部の指導方針について話を聞くことができた。釜山市では、新羅大学関係者から最近の大学改革、学生生活等について聴取することができた。韓国では「教育ビジョン・二〇〇二・新しい学校文化の創造」に基づき改革を行っている。大学については二〇〇二年より大学入試制度改革が行われ、現在に至っている。

### 武漢市とその近郊農村・近郊都市との物流の変容過程についての調査

研究員 河野 次郎

期 間 二〇〇三年八月二四日～八月三一日

調査地 武漢、上海

最近の中国では「西部大開発」に示されるように、内陸部の経済開発が重視されている。その開発方針は国内全域の統一した発展をはかるものではなく、地域ごとに中核都市を指定し、その都市を中心に経済ブロックを形成し、その地域の地理、伝統などを利用した独自の経済発展を行い、各ブロックごとに先進地区との格差を縮小しようとするものである。今回はそうした都市の一つとして武漢市を訪れた。

長江に面した武漢税関からのびる江漢路はかつての租界の面影を残した

商業都市ハ漢口を中心街であった。北京の王府井と同様にかつての風物を彫像として配置し、歩行者天国にして、観光・ショッピングスポットとして再開発されている。訪問した当日は四〇度を超える気温で人出が少なかった。道の両側の商店は新装した老舗が残るとともに、若者向けの衣料品などを中心にカジュアルな中小店舗が数多く進出し、ブラジル料理の店があるなど、観光客目当てというより、武漢とその近郊の消費の新しい傾向を反映したものであった。

漢水沿いの漢正街は湖北省をはじめ、湖南省の北部、長江沿岸の農村の自由市場への卸売り商店地区である。衣料品を中心に生活用品、日用雑器、小家電から、玩具、食料までなんでもありの商店街が交差している。取引は農村の小商店主や露天商が直接ここに買い付けに来るようである。商品は買い付け人がそのまま担いで帰ることもあるが、上記の範囲内では簡単にトラック輸送が頼めるとのことであった。商品の種類、質、価格とも実に雑多であったが、最新の製品の模造品がかなりの量を占めていた。実用品であるので模造という表現はびったりではないが、新しい消費物資が中国に普及する一つのあり方を示していることは間違いない。できれば公共交通手段を使ってこうした小商人とともに近郊の農村まで出かけたかったが、日程の都合及び暑さのため実現できなかったのは残念であった。

その他、武昌地区の中商広場や、漢口地区の武漢広場のデパートなどを訪れた。衣料品を中心に北京、上海などでは輸入品の模倣からはじめ、それに対する競争的な商品を生み出した新しい中国ブランドが、武漢では経済発展に伴う新しい消費層への主力商品になっていることなどが観察できた。こうした商品の中で子供用品は大きな部門をなしているが、その中で日本

のアニメのキャラクター「ちび丸子ちゃん」がそのまま「桜桃小丸子」として中国製品のブランドになっていた。すでに北京などで知っていたが、地方都市でもかなりの売り場面積を占めているのを見ると、日本文化と中国市場のこれからの関係を考えさせるものであった。

今回の武漢訪問では例年より長く続いた暑さに、行動をかなり制限された。その一方で、初乗り三元（北京、上海では十元）の冷房の効いたタクシーが日中の交通手段として多くの市民に使われることや、夜間多くの人が上半身裸で買い物や、飲食、広場でのダンスを楽しむなど、伝統的な暑さ対策が今でも活用され、効果的であるなど、庶民生活の多様性を見ることができた。又、武漢長江大橋の車のナンバーによる通行規制など、交通渋滞など都市問題も改善されるべきものがあるが、数カ所ある長江の渡船が歩行者と自転車にとって現在も有効な交通手段となっているなどこうした多様性の一つであるし、今後の武漢のあり方を示すものであろう。

上海訪問では短い時間ではあるが、新開発の浦東地区だけではなく、低所得地区であった旧上海城内への高層、高級アパートの進出、国際化の中で、あふれる輸入品などダイナミックな中国の経済発展の現場を見ることができた。その日の夕食の雑談で、人民元の切上げが問題となった。その時中国の会食者から、武漢の海関（税関）は今でも機能している。為替の切上げで中国の輸出を減らそうとしたら、武漢の税関をもっと使うだけだ。物価が安いあそこならもっと安く輸出できる。現在の中国経済の最大の問題は国内の格差であり、それを有効に調節して国内全体の経済活動を活発にすることである。日本にとっても中国からの輸入を制限するより、内陸部の開発で、より大きな市場が生まれる方が好ましいのではないかと

の発言があった。その通りではあるかもしれないが、武漢と上海の違いは商品の価格の差だけではなく、その生活の違いであることも感じさせられた訪問であった。武漢での行動では、華中科技大学の日本語学科の諸先生のお世話になったことを、感謝とともに付け加える。

### 沖縄におけるマメ類の儀礼に関する比較研究

研究員 大越 公平

期 間 二〇〇三年一〇月三十一日～十一月八日

調査地 沖縄県 平良市、伊良部町、那覇市

今回は豆に関わる民俗の一つとして宮古民謡「豆が花」についての伝承の考察を目的とした。

一〇月三十一日午前七時三〇分、羽田空港から直行便に乗り、宮古島へ向かう。JTA機内誌『コーラル ウエイ』には、沖縄大学の比嘉政夫教授のエッセイが載っている。テーマは、与那国島のカイダー文字についてである。まだ十分に説明されたとはいえないし、すでにその手掛かりを失っている民俗の一つでもある。この説明のなかに、穀物を示す絵文字が紹介されている。豆に関する文字、デザインがどのような意味をもっているかについては比嘉教授の直接のテーマではないが、今回の調査のテーマである「豆」を示す文字も大きく掲載されているので、二時間半の飛行時間はあれこれ考えるのに都合のよい時間となった。米、粟、等々の穀物との違

いを微妙に表現している。どうしてそのように表現されるのであろうか。柿と思われるものに盛られている様子は穀物すべてに共通することのようであるが、枳から盛り上がっている部分で、アズキ、豆（大豆であろうか）の区別がある。少し大袈裟に言えば、民俗認識の本質にふれる事柄の一つかもしれない。当初は予定していなかったが、調査旅行の開始早々に新たなキーワードを加えた。

### 「豆が花」（宮古民謡）に歌われているマメのイメージ

宮古民謡に「豆が花」という有名な宮古民謡がある。この花は何の花であらうか。沖縄民謡で「花」といえば古くは若い女性のたとえで使われることがほとんどで、最近の沖縄ポップスでは、「花を咲かせる」という使い方、人生の成功を示すことが多いと解説してくれる民謡研究家もいる。実際、穀物としてのどのようなマメを示すのだろうかという質問には、当惑する人も多かったが、答えてくれた人びとが示したマメは、ほぼ一致していた。シマアズキであり、薄紫色に咲くこのマメの花であった。これ以外には考えられないという人もいた。

以前、地元の新聞社に問い合わせたことがあり、編集局から紹介していただいた民謡研究家・渡久山春英氏は、次のように説明してくださった。

五穀物のうち豆類は大豆・小豆・緑豆などが人頭税の時代から上納物として、また農民の栄養源として栽培されていたようである。宮古民謡の「まみがばな」の豆は、「アキシアルヌ、ツウガバナサキスウルイ、バイカジヌ、ナゲカジヌ、ハヤラシバ」という歌詞があり、「夜明けの露に花は咲き揃い、南風の心地よく走る」と解釈してみた。

露は晴れた風のない夜間に地表の水蒸気が露点以下に達したときで  
る。八・九月頃である。また、夏至の終わる頃はカーツ・パイ（夏至  
の南風）という頬を撫で走る心地よい風が吹く。この露と風の時季に  
思い当る豆の花は「小豆」以外には考えられない。小豆の花は、臙脂  
（えんじ）紫色であり、畑一面のこの花が朝露に濡れると美しさは倍  
加するのである。美しい花も娘の若さもはかない露の命にたとえて、  
権力者が農民の娘をオヤンマに乞う件りがある。

（一部は渡久山氏が二〇〇二年に書かれたエッセイを参考にした。渡  
久山春英「豆が花（まみがばな）」が訓えるもの 二〇〇二・四・二  
五 宮古毎日新聞（平良市）

シマアズキは、十五夜等の行事で作られる豆餅（フチャギ）に使われる  
豆である。ここ数年、宮古空港の土産物店でも健康食品ブームにあやかっ  
てであろうか、「島あずき」（黒いササゲ）が特産品として販売されるよう  
になった。サトウキビ栽培の緑肥として始められたと伝えられるマメが地  
域活性化に一役かっている。八重山諸島、沖縄島でも店で見かけることが  
多くなった。また、商品とはならないまでも、沖縄の各島で栽培されてい  
る。類似のマメは種子島や屋久島でも栽培されている。さらには、東北地  
方で栽培されているマメとの関連も考えてみる必要があり、本格的に研究  
を展開するならば、全国各地のマメ栽培と民俗の関連を考察の対象とする  
ことになるだろう。文化人類学、民俗学の分野においては、稲作と民俗と  
の関連についての研究に比べて、マメの栽培と民俗との関連についての研  
究展開は、今後に期待しなければならない状況にある。

かなり数年前から儀礼研究の一環として、こうしたマメに焦点を絞る儀

礼やそれに関連する習俗の調査を行っている。まだ関心を持つ研究者はい  
ないが、沖縄文化の特徴を探るための新たなポイントであると考えている。

### 豆が花と大潮

シマアズキの花が咲く季節に生活暦として言い伝えられてきた事象の一  
つが、豆が花潮（まみがばな じゅう）である。

六・七月に小豆の花が満開となる時期には、潮は大きく満ちはじめの  
で、漁や潮干狩をするときは早く帰りなさいという言い伝えである。渡久  
山氏も、子供のころに、よく聞かされた記憶しておられ、潮干狩りや魚  
獲りは他の季節に比べ沢山獲れることが多く、その大潮で夢中になってし  
まい、家へ帰ることを忘れないようにという戒めだったという。

今回、聞くことができた事象はこの事象だけに留まった。新たな事象に  
ついて聞き書きするのは難しいと思われるが、自然暦として動植物や気象と  
暮らしの関わりに対象を広げていくならば、「豆が花潮」の事象について  
もより詳しく把握できるであろう。

### カイダー文字にみる豆の文字（記号）

宮古島から那覇へ移動し、県立図書館でカイダー文字に関する文献を探  
した。図書館員からレファレンスされるのは、確かに古い研究ばかりであ  
る。沖縄文化の特徴を世界的な諸文化との比較のなかで位置付ける試みの  
一つとして「カイダー文字を通じて世界の文字の特徴を見直す必要が出て  
きそうだ」と指摘する渡邊（一九九三）が「戦後に研究が進展したことを、  
わたくしは知らない」と振り返っているように、研究の展開は停滞気味で

ある。

私も矢袋喜一の『琉球古来の数学と結縄及記標文字』（一九一五）を生時代から目にしていたが、特にこの文字に関心を持つことはなかった。懐かしい本を改めて眺めながら、豆に関する文字（記号）を探した。確かに記されている。

矢袋（一九一五）によれば、与那国文字は沖縄における記標文字のなかで最もよく知られたものであるという。古く結縄を用いており、数字を主に使っていたのは六〇年から七〇年前である。大正年代までは使われていたという。数字の他に物を示すものが三〇余り掲載されている。

赤豆と豆は図1、図2のように描かれている。下の四角は升なのであるか。

多くの穀物を描く際には必ず用いられている。横棒は何であろうか。舂切りのような気もするが、予断は禁物である。豆と赤豆の違いが明確ではあるが、何に由来するものなのであるか。なお、矢袋（一九一五）はこの文字を与那国文字といい、八重山に見られるカイダー文字とは区別している。多くの研究者はこれをカイダー文字の主なものとして挙げている点に違いがある。

笹森義助の『南島探験』の明治二六（一八九三）年八月二二日の記述にある



図1 赤豆を示す文字（記号）  
（矢袋 1915）

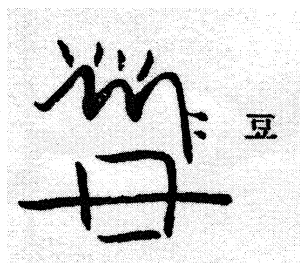


図2 豆を示す文字（記号）  
（矢袋 1915）

「与那国島該島人通用字書取」には数字、物を示す文字の一つにマメが挙げられている（図3）。ほぼ同じ主旨で書かれたものであろうが、かなり復刻されている。この文字におけるマメ類の象形化について言及したものはない。

この赤豆が何か、豆が何かについても特定しなければならないが、決定する資料を持ち得ないので、常識的な判断から赤豆は小豆、豆は大豆と仮定して考えてみよう。では、今回のテーマであるシマアズキがどのように表現されるのか、直接の結びつきを示すものはないが、おそらく赤豆との関連が考えられよう。現在八重山でのシマアズキは、宮古島、あるいは多良間島から持ち込まれたものが多く販売されているし、一部では栽培されているという。果たして明治・大正時代はどのような状況であったろうか。

現在は、カイズバラ（穀物入れ）の蓋の裏側に記されたもので、竹富島喜宝院蒐集館に保存されているものが紹介されている。しかし、概説的介绍がほとんどであり、分析の視点が定められていないといえる。一つの研究視点として他の象形文字と比較研究をする試みがある。私もこの視点にならない、トンパ文字のなかで豆を探すと、かろうじて豆、蚕豆の文字が紹介されている文献を見ることがで

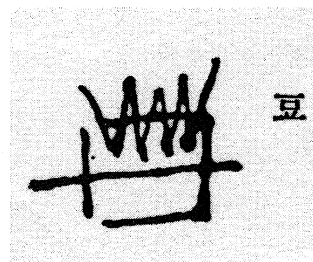
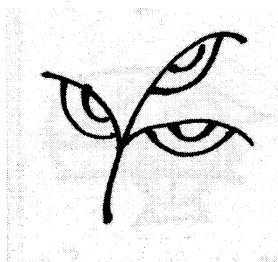


図3 豆を示す文字（記号）  
（マメ類に関する文字はこれだけである。笹森 1968）



大豆 / soybean

図4 大豆を示すトンパ文字  
（王 1996：117頁）



きた(図4)。

まだ、詳しい検討が出来ない前に予断は許されないが、文字のデザインに大きな違いがある。カイダー文字が納税の目的に使われたであろうことから、枘に入れた豆を描いているものと予測される。こちらは種子そのものではなく、その苗(あるいは葉)を描いたものと類推される。蚕豆についても種子そのものではなく、苗(あるいは葉)が描かれている。この違いはどのような意味をもつのだろうか。納税品目としての特徴、あるいは食文化としての特徴を示すものであろうか。

簡単に文献を調べた段階では、カイダー文字の実物ではなく、研究者が紹介している事例に留まらざるを得なかった。研究者が掲載している図版にも多少の差がある。原典があるのか、それとも本来使った人びとによって多少の差があったものが示されているのかについては、確実な答えを出せる状況にはないことを知りつつも、ある程度のアプローチを試みたいと思っている。

今回の調査は、マメの花が咲くころと大潮の時期が一致していることから作られた自然暦(民間暦)の一事象を知ることができた。マメ類に関する儀礼(年中行事)のみならず、民俗全体を視野にいれて検討する切掛けを見つけた調査であった。

また、これまでの古典的な文献についてもこのような視点から分析することで、数少ない資料としての新しい価値を見出せるのではないだろうかと考えている。

#### 参考文献

- 王 超鷹 一九九六『トンバ文字』東京：マール社  
笹森儀助 一九六八(二八九四)『南島探験』四四七―六〇二頁(宮本・原口・比嘉(編)『日本庶民生活史料集成』第一巻 探検・紀行・地誌(南島篇) 四四七―五八三頁 東京：三一書房)  
渡久山春英 二〇〇二『「豆が花(まみがばな)」が訓えるもの』『宮古毎日新聞』(二〇〇二・四・二五) 沖縄・平良：宮古毎日新聞社  
比嘉政夫 二〇〇三『カイダー文字の謎』『TA機内誌』[Coral View] 新北風号 (No. 80) 二二―二七頁 那覇：日本トランスオーシャン航空  
矢袋喜一 一九八二(一九一五)『琉球古来の数字と結縄及記標文字』第三版 那覇：沖縄書籍販売社  
渡邊欣雄 一九九三『カイダー文字 世界屈指の記号』『世界のなかの沖縄文化』六〇―六三頁 那覇：沖縄タイムス社

午後——沖縄県立博物館および県立図書館にて、主に東南アジア関係の資料を収集した。

一月二日(日)

日曜日のため、公的機関は休業。その日は、那覇市内の市場調査。東南アジアからの商品の輸入の状況を、那覇市公設市場等を中心に視察して回った。

一月三日(月)

浦添市にある国際協力事業団・沖縄国際センターを訪問。

(1) 国際センターの事業について説明

① 途上国の人材育成事業としての「研修制度」

② 技術専門家の派遣事業・開発事業

③ 開発途上国の青年との交流事業「青年招聘事業」

④ 地域との交流のための「国際交流事業」

⑤ 沖縄の青年が途上国の人づくり協力のための「青年海外協力隊」

⑥ 移住者を支援する「海外移住」

⑦ シルバー人材派遣事業

(2) 本調査のテーマについて説明

① アジア地域からの研修生の派遣状況

② アジア地域の研修生に対する主な研修内容と期間および年間計画について

③ アジア地域の研修事業についての現状と実績

④ アジア地域の派遣事業・開発事業の現状と問題点(課題)

⑤ 特にアジアの経済発展とそれぞれの国の抱える国際事業団への要

アジア地域から派遣される研修生の動向調査——沖縄国際センターを中心に——

研究員 比嘉佑典

期 間 二〇〇三年一月三十一日～一月四日

調査地 沖縄県 那覇市

一〇月三十一日(金)

午後那覇着。調査準備と資料収集に那覇市立図書館を訪問。那覇市が行っている自由貿易地域の現状について調査資料を入手した。

十一月一日(土)

午前中——沖縄国際センターが休日のため訪問を取りやめて、公的機関が浦添市図書館を訪問しアジア地域の資料を収集した。

望

⑥ アジアの開発についての今後の見通し

(3) 資料の収集

国際センターの事業に関するパンフレットおよびアジア関係の事業に関する資料を収集した。

一月四日（火）

午前中、沖縄国際センターで前日に引き続きインタビュー調査を行った。

午後の便で帰京。

## 二・構成員と具体的目標

前項に掲げた目標のために、本プロジェクト研究は次にあげる本研究所の六名から構成される。すなわち研究代表は後藤明がつとめ、東アジアにおけるイスラーム文明の伝播を研究しつつ研究の総括を行なう。本社会学部・教授の駒井義昭は東アジア地区を担当して主に近世における日本への南蛮文明（＝ヨーロッパ文明）の伝播を研究する。名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教授の西野節男は東南アジア地区を担当して主にインドネシアへのイスラーム文明の伝播を研究する。本社会学部・教授の宇佐美隆憲は東アジア地区を担当し、主としてミャンマーへのヨーロッパ文明の伝播を研究する。本社会学部・助教授の小林正夫は東アジア・東南アジア地区双方にまたがり、主にネパールへのヨーロッパ文明の伝播を研究する。本社会学部・助教授の三沢伸生は東アジア地区を担当し、主に前近代の日本におけるイスラーム文明の伝播について研究する。

具体的な目的としては、個々の構成員の専門とする研究領域における現地でフィールドワークや資料調査を基礎にしながら、東アジア地域と東南アジア地域において、前近代から近現代にかけて「イスラーム文明」と「ヨーロッパ文明」の伝播過程とを明らかにして、それによって異文化接触と文化変容とがどのような形で始まったかを明確にすることを目的とする。そのためにも構成員を核とした研究会を組織して個別の研究成果をもとに比較文明論的な議論を行なう。

## 三・活動成果

プロジェクト研究初年度にあたる本年度は月に一度のペースで研究会を

開いて研究全体の打ち合わせと、個々の研究成果に基づく比較文化論的議論を行なった。特に八月には宇佐美がミャンマーにフィールド調査、十一月には三沢がイギリス・フランスに文献調査、十二月に駒井が関西に文化遺跡資料調査に出かけた。成果公表としては、宇佐美が口頭発表を一回、三沢が学術論文を四本執筆した。駒井をはじめ他の構成員も次年度以降に順次成果発表を行なう予定である。全体としての比較文明論的な成果についてはその発表形式も含めて全体で調整しながら次年度以降に展開していく予定である。

以下は、今年度一二月までに実施した調査報告（宇佐美、三沢、駒井）である。

七五周年を記念してマンダレーでおこなわれるチンロンの大会ならびにイベントの参与観衆

研究員 宇佐美 隆 憲

期 間 二〇〇三年七月八日～一六日

調査地 ヤンゴン、マンダレー、バンコク

調査内容

マンダレーでおこなわれる第七五回ワゾ・チンロン競技大会（七月一日～三日）ならびに、この大会に伴って開かれたイベントの参与観衆。

この大会はミャンマーでも伝統があり、非常に古くからおこなわれていたチンロンの大会だけに、ミャンマー全土からチンロン選手が参加する。そこで大会に参加したチンロン選手たちを対象にして、どのような形でチンロンの技術を身につけていくのか、その実態を選手たちの語りから一つのモデルを提示してみたい。

七月八日にヤンゴン入りし、翌日、マンガレーまで飛行機により移動した。以下に、九日から一四日までの間に明確になったことを纏めておきたい。

チンロンとは、六人で円陣を組んで、その中で籐を用いて作られたボールを地面に落とさずに決められた技術（蹴り方）で蹴り続ける。これによって得点していく競技である。ボールを蹴る部位は六カ所に決められており、最初の五分は、①一人一人が決められた一カ所の部位で、左右それぞれ、同じ技でボールを蹴る。次の五分は、②六人とも同じ技（片方の足）で蹴る。次の五分が③審判が指定した部位を左右の足で蹴る。次の五分が④審判の指示に従って②と同じ方式で蹴る。最後の五分は、⑤一〇種類の高度な技（チンジー・セイミュー）を一人一人ができるだけ続けて蹴るという方法である。審判はこれらの蹴り方を見て、得点を加算し、最終的に最も高得点を獲得したチームが勝者となる。

チンロンの師弟関係について纏めると、次のようになる。

チンロンの場合、「師匠一人⇄弟子一人」というのが基本的な形態である。レッウエのように、一人の師匠が複数の弟子を持つという形態は、ほとんど存在せず、クラブチームのような形式も存在しない。これは後にふれるように、技術の伝承の方法とも関係すると思われる。師弟関係につ

いては絶対的で、レッウエの伝統的なトレーニング集団に見られるような擬制的親子関係が結ばれる。ただし、この関係はあくまでも師匠と弟子の一对一の関係において見られるもので、競技場面においては補欠も入れて七人から八人でチームが作り上げられるため、それを統括するためのコーチが別に指導に当たる。このコーチと選手たちの関係は、レッウエの近代的なトレーニング集団と類似する。

次に、技術が伝承される現場についても概観しておきたい。チンロンのトレーニングは、最初に足の形だけを作り、その形を維持しながら数百回、蹴るような形を続ける。このようなことを数日続けた後に、今度は実際にチン（ボール）を蹴る練習を始める。しばらくすると連続して蹴ることができるようになる。これを左右の足で出来るようにする。また、レッウエと同じように諺なども時間の合間を見て教えられる。

ミャンマー・チンロン連盟が定めた技は、現在、四〇種類ほどに上っているが、これら一つ一つを同じような方法によつて身につけていく。また、このように連盟が認定した以外にも技術は存在しているので、それらの技術も身につけようとする、そうとうの数に上ることになる。

いくつかの技術が身につけると、チンロン専用の練習場へと足を運び、ここで同じようにチンロンの練習に来ている人々の間に入って、楽しみながら練習をする。こうしたことを続けながら、時間があるときには師匠について技術を磨いていく。

技術レベルが高まり、試合に出場できるくらいになると、チームのメンバーの一員として加えられる。基本的にはチンワインの状態を作りながら、集団での練習を繰り返す。もちろん、その中の一人がうまく蹴ること

が出来ない場合には、そのワインから抜けて、一人で練習を繰り返す。前述したように、このようなチーム練習の時には、これを指導する専属のコーチがついて、よりスピーディに、より合理的な蹴り方になるようなアドバイスが繰り返される。

以上が、選手たちの語りを一般モデル化したものである。また、このような調査とは別に、この大会の中で開かれていたイベントも見学した。イベントとしては、一つが競技を抜きにおこなわれるチンロンのエキジビションであり、もう一つがチンロンに関する資料の展示である。前者には、カナダの実業家がこのエキジビションに参加し、それがテレビにて放映された。後者は、チンロン大会が行われている海上の横に、テントが張られ、その中にマンダレーのチンロンの歴史と関連する資料を中心に展示がされており、ミャンマーのチンロン史上、マンダレー出身のチンロン選手たちが果たした役割の大きさを感ぜさせるものであった。

今回の調査は、十分に時間を取ることが出来なかったことから、まだまだ確認されていないことも多いが、それについては今後の調査で補充していく予定である。

それでは、次にレッフエの状況に目をうつしてみよう。

レッフエとは、いわゆるビルマ式のキック・ボクシングのことであるが、グローブは着用せず、パンチとキックを主体として戦う打撃系格闘技である。ビルマ国内のレッフエの全体的な活動を統括しているのは、「伝統スポーツ連盟」であり、ここが基本的にすべてを掌握している。

しかし、そうはいっても興行としての大会は、大会規模から選手のマッチメイクもプロモーターによって取り仕切られる。マッチメイクをするに

あたり、選手は強さによって大きく四つのレベルにグルーピングされているので、これが参考にされる。次にレッフエの師弟関係についても概観しよう。

レッフエが伝授される組織の基本形態は、師匠（コーチ）と弟子（選手）の関係にあり、伝統的には師匠一人⇄弟子一人という形で指導がおこなわれる。しかしながら、一部クラブ化しているものもある。ここでいうクラブ化とは、師匠が一人ないしは複数に対して弟子が複数いる場合である。コーチである人々の大多数は、かつてレッフエの選手であった人で、たいていの場合、選手にお願いされて、コーチを引き受けることが多い。ただし、選手もコーチも仕事の合間を見て練習をする。練習の内容としては、キックやパンチの他に簡単なコンビネーションなどをおこなう程度である。ただし、なかにはミット（パンチ、キックなどを受ける）などを使用して、本格的なトレーニングを実施している場合もあるが、このようなトレーニングをするコーチは非常に少ない。これは経済的な理由によるもので、グローブをはじめとするミット類やサンドバッグは、やはりそれなりに高価なものだからである。

師弟関係については、後に分類するような、伝統的なトレーニングを実施する集団と近代的なトレーニングを実施する集団において違いが見られる。伝統的なトレーニング集団においては、師匠は絶対的な存在であり、擬制的親子関係にも似た関係が保たれるため、途中から他の集団に移籍するということは、よほどのことがない限り起こらない。しかしながら、近代的なトレーニングを実施する集団の場合には、コーチ（師匠）と選手（弟子）の関係はドライで、特定の試合を目指して師弟関係を結んだり、

あるいは継続的な師弟関係を結んでいる場合、両者の話し合いによって他のチームへ移籍したりする。ただし、この場合、コーチが仲介役を務めることは稀で、選手が自らの新しいコーチと面会し、その旨を伝えることで師弟関係を持つことになる。

では、最後にレッフエの技術伝承の現場について概観しよう。

トレーニングは、早朝にランニング、ウエイト・トレーニングをおこなうほか、夕方五時過ぎから選手たちがトレーニング場に集合して、ここで固定化された八種類ほどの練習を順番に一つずつローテーションでこなしていく。一つ一つのトレーニング時間は三分で、途中三分の休みが一回入る。選手たちは、これら八種類のトレーニングを二回ないしは三回、選手の技量に応じて繰り返し実施する。練習時のスタイルは、試合の時と同じように両手にバンデージを巻き、Tシャツ、短パンの出で立ちとなる。また、トレーニングは満月の日が休みとなる。

最後に技術の伝承現場を概観しておこう。ところで、このクラブに籍を置くにあたって、最初にトレーニングする項目がある。それは、「レッフエイエー」と呼ばれるレッフエの型である。この型はレッフエの六つの基本的な動きが含まれているといい、選手は試合が終了し、勝者となったものが勝ち名乗りを受けた後に、サインワイン（ビルマの管弦楽団）の奏でる音に合わせて、このレッフエイエーを舞うのである。

次に、体の動きを習得するために「トンパオチュン」と呼ばれる足運びの型が同じく最初に指導される。これは正三角形の線上で足を動かす技術である。この足運びのトレーニングも昔から伝統的におこなわれてきたもので、日々の練習の中に必ず取り入れられている。

前述したトレーニングをしばらく続けていった後、師匠が次のレベルに到達したと判断すると、次に「パンチョウ」を指導する。パンチョウとはいわゆる首相撲のことで、クリンチしたときに相手の首を押さえる技術のことである。これは防御と攻撃の両方の変化を可能とさせる技術でもあり、様々なバリエーションが存在している。この技術も日々の練習の中に取り入れられることになる。

以上は、伝統的なトレーニングを概観したものであるが、最後に師匠の指導の特徴についてもふれておこう。師匠は前述したトレーニングを実施するにあたって、ほとんど指導らしきことはおこなわない。選手たちの練習の状況を見守り、必要に応じて自らが見本を見せる以外は、ほとんど細かに注意を与えることはない。これはトレーニングが固定化されていることも関係している。また、レッフエと関係する諺などをトレーニングが終了した後に選手たちに話すこともある。

以上が、今回の調査によって明らかになった主要な点である。

### イギリス・フランスに保存される前近代における日本へのイスラーム文明の伝播に関する調査

研究員 三 沢 伸 生

期 間 二〇〇三年一〇月二七日～一月四日  
調査地 ロンドン、パリ

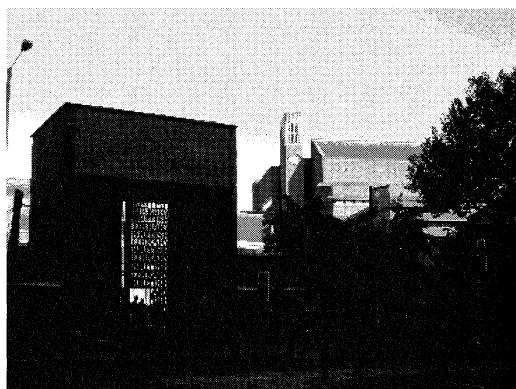


写真1 大英図書館



写真3 フランス国立図書館

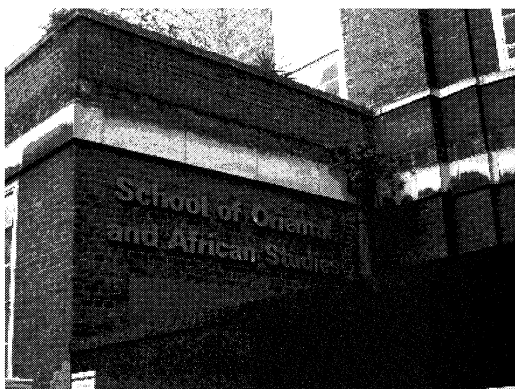


写真2 SOAS

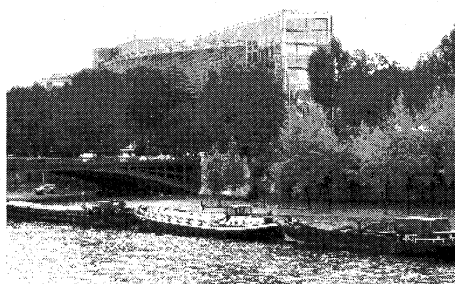


写真4 アラブ研究所

日本への本格的なイスラーム文明の伝播は明治以降に始まる。開国して間もない日本の公的機関・メディアにおいては諸外国との様々な交流の中で文化変容の現象が起きていた。しかしながら、公的機関・メディアの未発達により、こうした現象の記録についてははなはだ不十分である。しかし、横浜開港以来、はやくから日本に拠点を構えていたイギリスやフランスは情報の重要性を熟知していたために、そうした日本と諸外国との交流や文化変容に関する記録を行なった。そしてこうした情報は、本国に報告されて保存されていた。したがって、前近代における日本情報については、イギリス・フランスは日本以上に詳細な記録を有しているのである。

こうした認識の上になつて、本調査はイギリス・フランスの公的機関に所蔵される明治期の日本におけるイスラーム文明の伝播とそれによって生じた文化変容に関する資料の所蔵調査を行なうことにある。

イギリスにおいては、何より世界でも屈指の図書館とされる大英図書館 (British Library 写真1参照)、ロンドン大学のアジア・アフリカ研究所 (SOAS 写真2参照) において活動した。

フランスにおいては、パリで、国立図書館 (Bibliothèque nationale 写真3参照) ならびにセーヌ河畔に設立されたアラブ研究所 (写真4参照) の二機関、両国あわせて合計四機関において、文献資料を中心としてそうした資料の所蔵状況を調査した。次年度以降において、諸資料を利用した研究成果を発表する予定である。



# 日本における南蛮文化の資料収集

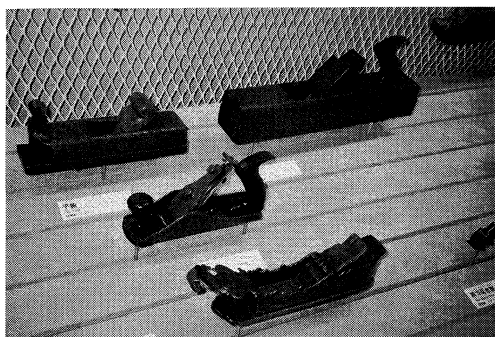
研究員 駒井義昭

期間 二〇〇三年二月一日～二月十九日

調査地 神戸市立博物館、神戸竹中大工道具館他

## 一、「竹中大工道具館」での調査。

かつて長崎に在住したオランダ商館医のシーボルト（一七九六―一八六六）はオランダへの帰国時に、日本の文物を大量に持ち帰った。その中に、当時の大工道具一式が含まれていた。彼がオランダに持ち帰ったものを、現在、この博物館所蔵のものと比較検討するための調査と資料収集を行った。また、この博物館には最近、西洋・



西洋のカンナ（神戸・竹中大工道具館）

中国の大工道具も展示されはじめたので、その使用方法の違いを比較文化的な視点から調査した。

## 二、「神戸市立博物館」での調査。

かつて南蛮堂と号した池永孟（はじめ）（二八九一―一九五五）の南蛮文化コレクションを母体にした、この博物館には有名な初期南蛮屏風「泰西王侯騎馬図」（四人の王侯の戦闘図）（重要文化財）と扇絵「都の南蛮寺図」ほ

か数々の文化財が展示されている。とりわけ、前者は桃山時代の蒲生氏郷（一五五六―九五）が描かせ、代々会津藩に所蔵された襖絵だといわれている。

明治維新時の会津戦争のとき、落城する鶴ヶ城で藩主から長州藩士・前原一誠に授けられたもので、この絵と対をなすもう一つの「泰西王侯騎馬図」（非戦闘図）（現・サントリー美術館蔵）との画中人物・両画の関係などの調査のため、さまざまな資料を収集した。また扇絵「南蛮寺図」は、当時・京都に存在した南蛮寺の建築構造を伝える唯一の資料であり、小品ながら詳細な調査が必要であった。

## 三、「京都国立博物館」「京都文化博物館」での調査。

二、の調査と関わって、桃山時代における京の町並みと「南蛮寺」の位置関係およびイエズス会修道士と都の人々との人間関係の調査。また、当時の「南蛮寺」と織田信長終焉の地「本能寺」（当時の位置）とはその距離三〇〇メートルぐらいであることなど実地調査も行った。さらに、信長と南蛮人との関係や数少ないキリシタン墓碑などの現地調査も行った。

## アジア文化研究所プロジェクト研究「中国西部大開発研究」

研究員 阿部 照 男

参加者 針生清人、谷口房男、横川伸、山下清海、宮川朝一各研究員、  
飯塚勝重客員研究員

本年度より研究所内プロジェクトとして、中国西部大開発をグランドテーマとしたプロジェクトが発足した。「中国西部大開発」は、中国政府が二〇〇〇年から総力をあげて取り組み始めた21世紀の一大国家プロジェクトであり、今後の中国の命運をかけた経済戦略である。アジア文化研究所として、この数十年にわたるであろう大プロジェクトを長きにわたって跡づけることが重要であると考え、本プロジェクトを立ち上げることにした。さしあたり本年度は、『中国西部大開発と地域社会の変容』というテーマでスタートしたが、来年度のために、『西部大開発にともなう中国中・西部地域の社会的・経済的・文化的変容』というテーマで、文部科学省・科研費も申請している。

また、来年度のために、学内プロジェクト、科研費プロジェクトとも、チームメンバーを増強して望む方針である。

本年度は、二回の講演会開催、一回の国際シンポジウムを開催し、今年度末に中国で実態調査を行う。

（講演会および国際シンポジウムについては、本研究年報で報告している。また本年度末に予定されている調査とシンポジウムについては、次年度研究年報に報告する。）